

あおば わかば

JULY — 2002

宮城教育大学広報誌

VOL.3

MIYAGI UNIVERSITY OF EDUCATION

宮城教育大学

発行:平成14年7月23日

編集:宮城教育大学広報委員会

〒980 0845

仙台市青葉区荒巻字青葉

TEL 022 214 3306

URL <http://www.miyakyo-u.ac.jp/>

E-Mail bunsyo@staff.miyakyo-u.ac.jp

特集:教師に求められる力

座談会:教師に求められる力と大学で学ぶこと

論 点:手の届くところに辞書を

学外活動紹介:

県教委と連携し 不登校 相談をサポート



「先生、ずっとつなげて川にするんだよ!」
(附属幼稚園での公開研究会より)



まちはいつも
教室だった

遊ぶ 学ぶ

昭和31年5月の「仙台青葉まつり」。仮装行列を見に集まってきたのは、東二番丁小学校の子どもたち。扮装しているのは商店街の檀那衆、中には見知った顔もあったろう。心が浮き立つ晴れの日は、地域のイベントを支える大人の姿に接する機会でもあった。1956年(昭和31年)5月・仙台市東二番丁(写真提供/高橋こうけん氏)

特集

教師に求められる力

〔座談会〕

教師に求められる力と 大学で学ぶこと

出席者

制野 俊弘氏

河北町立飯野川中学校教諭
(1988年3月中学校教員養成課程保健体育専攻卒業)

佐藤 美由紀氏

仙台市立中山小学校教諭
(2002年3中学校教員養成課程学校教育専攻卒業)

司会

久保 健

保健体育講座教授
広報委員会委員



教師に 求められる力

久保 教師には、授業、行事やクラブ活動、学級経営や生活指導、問題を抱えた子どもに対応する力、カリキュラムづくりなど、さまざまな力が求められます。教員養成大学では、そうした力の基礎を養うためのカリキュラムが組まれています。そこで形成される力や教養は、今日の教師に求められる力となり得ているでしょうか。他方、そこに学ぶ学生は、授業、教育実習、卒業研究、ゼミ、サークル活動、ボランティアやアルバイトなど、さまざまな活動にいそしんでいます。そのうち何に時間と精力を割き、どのように未来の教師として自己形成を図っているのでしょうか。

今日は、そのような視点から、本学を卒業して教職についておられるお二人の先生にお話をうかがいたいと思います。まず、この4月、小学校の教

師になったばかりの佐藤先生から、教師の仕事と教師に求められる力について経験したこと、感じたことをお話しください。

佐藤 学生時代には、教師とは子どもたちと楽しく勉強したり遊んだりする仕事と思っていました。でも、休みに時間に連絡帳に返事を書いたりといった事務的な仕事は想像以上に多く、何を優先すべきか戸惑いました。

何より痛感したのは、教師には、子どもたちに対しても、職員室で他の先生に対しても「話す力」が必要だということでした。「話すことのプロ」でなければという印象を持ったということです。

制野 子どもたちと遊んだり、じっくり話し合う時間は本当に少ない。とにかく忙しい。それは10年たっても同じで、変わったとしても少々要領がよくなり、やることに優先順位をつけられるようになる程度です。子どもと話す時間は先延ばしできませんから、最優

先しているのは当然ですが、教員同士で話し合うことはとても大切ですが、最近は、職員会議の場でもあまり緊迫した議論はなされない状況にあります。

久保 学生時代に、異なった意見を闘わせて議論する経験はありましたか。

佐藤 ディスカッション形式の授業もありましたが、議論というレベルまではいきませんでした。でも、サークルでは、本音のぶつけ合いでした。話す力が、その中で少しは培われたのではないかと思います。

久保 制野先生の学生時代にはどうでしたか。議論が熱くなり、つかみ合いにまでいったというような印象があるのですが。

制野 専攻のための合同研究室があって、そこでくり返し議論しました。週1回の話し合いがあり、担当者は原案をつくって準備します。いろいろな行事を企画するときも、先輩後輩関係なしに議論しました。自主ゼミではトントン議論をしました。学習しながらの

議論ですから、互いに未熟さを自覚しているのですが。

久保 お話を聞いていて、公式の場と私的な場が入り組んだ場での議論を経験することが大切だと感じました。そうした経験は、教師になってからも、本音をぶつけ合うことで分かり合う議論をする上で役立っているとお考えでしょうか。

制野 私は、熱くなる方ですが、それでも自分と他人の信念がぶつかり合う場面になると、職場の人間関係を優先させてしまいます。酒を飲んだ場で本音が出て、翌日後悔するといったことになりまして。「子どものために」ということでは、どこまでも議論すべきだし、できると思っています。

授業を 成立させる力

久保 佐藤先生は、小学校でのこの2カ月、全教科の授業に取り組んで、いろいろ感じたことがあるかと思いますが。

佐藤 2年生の担任ですが、まず、子どもたちを授業への体勢にもっていくのが大変です。最初は、あまりにうるさかったり、授業に遅れる子がいたりした場合、待っている以外ありませんでした。私はそこでまず力不足を感じました。毎日4~5時間ある授業の教材研究も思ったようにやれていない状態です。子どもたちには申し訳なく思うのですが…。

全部の授業について計画を立てるのですが、具体的な発問や子どもがどう答えるだろうといったところまでいっていません。流れを考える程度になっているというのが正直なところです。「1日にひとつだけでもいいから特に力を入れた授業を」と助言を受けています。

制野 私も、1年目に担当した3年生の授業はほとんど成立しませんでした。寝ている子もいました。生徒を探しに行ったりもしました。大学で授業経営についてほとんど学ばなかったこともあり、つい管理的になっていきました。ですから、授業はうまくいきませんでした。

それである時、授業中眠そうにしている子どもの話を聞いたんです。中に

夜遅くや早朝、家の手伝いをしている子がいたんです。地域の特殊性なのでしょうね。そのような地域や家庭の実情が分かった時、子どもの見方が変わり、授業のやり方も変わりました。

ポイントは、学級や授業であれこれ問題を起こしている子どもたちの心の中を考えることだと思います。いま担任をしているクラスも、うるさいことはうるさいのですが、私が何か言うたびに積極的な反応があります。他の先生方とは「教師の話を聞いているから、いろいろ考えているから、うるさいんだらうね」と話しています。

久保 そういう、授業の経営面や、子どもの見方などについて、大学ではどう学ばれたのでしょうか。

制野 生徒指導や生活指導に関する講義の記憶はほとんどありません。いざ学級担任になって学級づくりといわれても見当が付きませんでした。

佐藤 「児童理解」という講義で、不登校や荒れの例を聞いたことが、すごく役立っています。授業を抜け出して戻ってこない子どももいますが、そういう事態に直面しても戸惑うことはありませんでした。

大学の講義は 役立っているか

久保 教材研究や教科の内容に関して、大学で学んだことは生きているのでしょうか。

佐藤 「教材研究法」は役に立っています。特に印象に残っているのは、講義の中で現場の先生のお話を聞けたことです。実技も使えそうだと感じました。しかし、小専（小学校教科専門）科目の中には、どうしてこんなことをやるのか疑問に感じるものもありました。専門的過ぎて期待していたものとは違っていたからです。

久保 制野先生は中学校課程ですから、専門科目は40単位前後ということになりますが、現場に出て授業をつくるとき知識や技術は十分でしたか。

制野 スポーツ好きの私は、毎日ジャージを着て運動するいい商売(笑)という体育教師のイメージをもって体育専攻に入りました。専門の実技や理論

を学んだ後の卒論のテーマは、運動の苦手な子どもを含む学習集団の指導でしたが、教員になって3年くらいは、専門で学んだことと卒論でやったことが、実際の授業の中ではつながりませんでした。

久保 体育が嫌いだったり、苦手でどうしたらいいかわからない子どももたくさんいる体育の授業をつくるには、大学で習ったスポーツの技術や理論だけで授業を組み立てられるかというと、そう簡単ではありません。技術やルール、指導方法を工夫したり、教科の内容をもっと深く研究したりすることが必要になります。

制野 そのとおりでした。それと同時に、実際に授業をするときには、目の前の子どもたちが何を望んでいるかとか、生活背景はどうなっているかに目を向けることが必要になります。その両方が見えたとき、初めて授業の目標が定まり、何を教えるべきかが導き出されてきます。大学を卒業したばかりの頃は、そこまで目が行き届かず、うまくいかないといふ大声を出してしまっていました。

久保 後の方の視点はどこで学ばれたのでしょうか。

制野 私の場合、教育研究サークルや組合の教育研修でした。それと、子どもから徹底的に鍛えられました。「先生は何も分かっていない」と言われたときはつらかったですね。

久保 先ほど佐藤先生が、小専科目で、小学校の授業とは関係ないと思われるような難しい専門の講義を学ぶ意味があるのだろうかと言われました。考えてみると、教員養成大学の学生といたながら、教育の現場や子どもを知らずに教育の勉強を始めるわけです。ですから、教育現場と接する機会があれば、いま学んでいることと将来の教師の仕事とを結びつけやすくなると思います。それをカリキュラムとして保障しているのが教育実習です。教育実習を経験したことで変化はありましたか。

佐藤 自分が学んでいることと教育の現場がどうつながっているのか、教育実習を体験して初めて見えてきたように思います。



制野 俊弘
河北町立飯野川中学校教諭

制野 教育実習を体験する前に、小学校のスキー教室の指導をする機会がありました。初日を終えた夜、グループ編成を子どもたちの能力別に見直そうということになりました。でも、なぜか腹が立って「下手な子を下のクラスに下げるのは安易じゃないか」と反論しました。上達しないのは誰の責任かという疑問があったからだと思います。

教育実習はもちろんですが、それ以外でも、子どもと接する経験を通して、大学の授業に対する見方は変わりますね。

久保 教師生活を何年か経験して、子どもの見方や対応のしかたなどがある程度身についてきたときに初めて、先ほど「関係ない」とされた専門的な内容の必要性が見えてくる。そうした学習がなければいい授業はつくれないと思うのですが。

制野 そうですね。走り幅跳びでもサッカーでも、中学生と本気で授業に取り組むときには、それらの技術やルールについて、「踏み切り線やオフサイドはなぜあるのか」という歴史的背景や文化性も含めた研究の必要性が出てきます。それをしなければ、子どもた



佐藤 美由紀
仙台市立中山小学校教諭

ちをもう一段高いレベルに引き上げていくことはできません。

小学校の先生は全教科をやらなければならぬから厳しいのではないですか。

佐藤 先輩の先生からは「ライフワークとなるような、ひとつの教科を深めていきなさい」と言われています。

表現力と 教科外活動の指導

久保 佐藤さんは、美術や舞踊が得意だそうですが、そうした表現活動体験を踏まえて、身体を丸ごと使った表現という面での、大学と教育現場のつながりはどうでしょうか。

佐藤 ダンスを教えるにしても、教師自身がその楽しさを体験しているのといないのではまったく違ってくると思います。私自身は、大学時代に民族芸能のサークルに所属していましたので、踊ることの楽しさを体得していたつもりでしたが、教職について初めての運動会でダンスを指導したとき、教えるという面では経験の豊富な先生にかないませんでした。自分が好きということと指導技術は違うということを実感しました。

久保 運動会や学級活動、部活など教科外の活動を指導する際に、教師が細かく指示を与えるのではなく、いかに主体的、自発的に動ける子どもにしていくか、それも教師に求められる大きな力ですね。

制野 今の子どもたちは、面倒なこと、手がかかることをいやがるので、動き出すまでに時間がかかりますが、感動することに対する欲求は強いと思います。それでも、言葉で言ってもダメで、活動自体をいかに面白くするかの仕掛けが必要です。

前の勤務校の校長先生は「運動会を契機に子どもたちが変わる」とおっしゃってられました。運動会は縦割り活動になるのですが、3年生は面白さを体験していますから、率先して1年生を指導します。教師から教わるよりも、先輩から教わることで、子どもたちは大きく変わるので。

久保 行事やクラブ活動の指導につい

ては、大学時代に学んだことは役立っているでしょうか。

佐藤 私が所属していた民族芸能研究会は、学内で新入生の前で踊ったり、施設や地域のお祭りに行きって踊ったり、逆に、現地に出かけて行って保存会の人たちから教えていただいたりしていました。

大学の外に出て行って、小学生から年輩の方まで、地域の方々とふれ合ったり交渉したりする事を通して養われる「関係づくりをする力」はとても大切だと思います。

制野 私も、陸上競技部で同じような経験をしてきました。学生時代にそういう経験があるかないかは大きいと思います。でもそれが子どもを指導する時にそのまま役に立つわけではありません。自分の中で一度焼き直すことが必要になると思います。



久保 健 教授

久保 そういう力を育てる授業を大学のカリキュラムに組み込むことについては、どうお考えでしょうか。

制野 大学の講義でやることに意味はあると思いますが、そういった力は教わって身に付くものではないような気がします。自分たちで何かしようという目的があり、その達成のためにみんなで議論しながら経験を重ねることを通して身に付くのだと思います。

教師の再研修の場 としての大学院

久保 最後に、教育の現場を経験した上で、大学院でもう一度学び直したいという気持ちはありますか。

制野 教職について最初の数年は、いろいろなことをどん欲に学びました。その後も、目の前の子どもをどうするか悪戦苦闘してきましたが、最近

は経験だけで授業をしてしまうことが多く、これでいいのかと反省しています。自分のこれまでの実践が、教育や体育の専門的な理論とどう絡んでいるのか考えてみたいと思うようになりました。そうした場として、大学院で学ぶことには魅力を感じます。

久保 宮教大の大学院に求められていることに、カウンセリングに関わることがあります。一般普通教育と障害

児教育の重なり目とか、健康と病気の重なり目といったところで、子どもをめぐるわけの分からない状況が起きています。従来の教科指導能力や生活指導能力だけでは対応できない部分です。現職教員が再度学習する場として、大学院は極めて重要だと思います。

佐藤 私は、卒論で、アートセラピーと自己表現について研究しました。最近、不登校や学習障害など、子どもをめぐるさまざまな問題が起きていま

す。今の私には、そういった問題を解決する力はないのですが、カウンセリングなどによる対応がこれからの教育現場で求められるのは確実です。その意味で、機会があればぜひ学んでみたいと思っています。

久保 お二人の話から、大学として今後、改善したりリニューアルしたりしていかなければならないことのいくつかが見えて来たように思います。長い時間ありがとうございました。

論点

手の届くところに辞書を



遠藤 仁

国語教育講座助教授

宮教大生の “ことば”意識

5、6年ほど前のことになるが、ある講義で受講者全員に小さな紙を配り、用例をあげながら「きれいだ」と「美しい」の違いを説明するよう求めたことがある。一例をあげれば、「きれいな字」は字体や字配りについて均整のとれていることが重視されるのに対し、「美しい字」はほれほれとするような美感を備えていることが求められるといった答えを期待してのことであった。しかし、期待は見事に裏切られたばかりでなく、3割もの学生がほとんど、あるいは全く書けていないことに愕然とさせられた。

たとえそのとき答えられなくとも、あとで辞書を引いてみた学生がどれだけいたであろうか。語句の意味がわからなければ国語辞書を引いてみるのは当たり前なことだが、単に意味がわかればよいというものでもない。たとえば、「辞書」は誰もが知っている語であるが、その用途を示す動詞を知らなければ、使いこな

したことにはならないだろう。「辞書を読む」こともないではないが、よほどの物好きか暇人^{ひまじん}のすることであろう。「辞書を見る」は、くだけた言い回しとしては許容されるが、しっくりしない。一方、「辞書を引く」や「辞書で調べる」なら、辞書そのものの用途と深く結びついた表現と感じられる。このように、どういう語にも慣用的に引き合う仲間が存在する。私たちはことばを学ぶ際にそうした仕組みを利用していることが多い。

教師という仕事と “ことば”

ここで提案を一つ。辞書に手が伸びるのはたいてい忙しいときではあるが、ちょっと手を休めてぜひ読み物として読み味わってみてはいかがだろうか。たとえば、「右」ということばは、「人のからだで、心臓のない側」「北を向いたとき、東にあたるほう」「日本の道路の場合、車が走る側とは逆の側」「野球でいえば、キャッチャーから見て、一塁側にあたる方角」「この辞典を開いて読むとき、偶

数ページのある側をいう」などと、各社の辞書は気の毒なくらいさまざまな工夫を凝らしている。それらの定義は、本当に正しいのだろうか。また、「女」を「男でない人。女性。婦人。おなご」などと説明する辞書に出くわすこともあるだろう。「男でない人」は「女」なのだろうか、「女性」と「婦人」と「おなご」は本当に等価なのだろうか、異なるとしたらどこが異なるのだろうか、自分ならどんなふうに定義しようだろうか。もっとも、そうしたことをまじめに考え出したら眠れなくなるかもしれないが…。

ことばが単なる記号や道具とみなされがちなのは、鉛筆で字が書けるのはなぜなのか考えてみるのがないのと同じであろう。しかし、ことばは人のありようを端的に映し出す鏡であり、磨きをかけなければ役には立たない。教師とは、ことばにもっとも近いところにいる人にほかならない。教師になろうとしている「卵」の皆さんに、辞書を手がかりとして、広く深いことばの海へ船出することをお勧めする^{ゆえん}所以である。

Outreach



不登校相談センターが設置されている
宮城県教育研修センター



県教委と連携し 不登校 相談をサポート

「宮城県不登校相談センター」を開設時から支える宮教大

関口 博久

障害児教育講座教授



増え続ける不登校

子どもの数がどんどん減っているにもかかわらず、不登校は今もまだ増え続けています。一体どうしてでしょう。子どもが学校に不応適を起こすようになったとか、学校や教育が今の子どもに適應できなくなったとか、さまざまな議論があります。しかし、本当の原因は誰もわかっていないのではないのでしょうか。

一方ではフリースクールや適應指導教室、スクールカウンセラー、心の教室相談員など、さまざまな受け皿が徐々に整備されてきています。「子どもが学校に行かないのは親の育て方が悪いから」と保護者の責任ばかり追求された昔に比べ、不登校もだいぶ市民権を得つつあると言ってもいいでしょう。それでもわが子の不登校を悩む親や、自らの不登校について困惑し苦しむ子どもたちがたくさんいることに変わりはないのです。

不登校相談センターの開設

増加する不登校に対して専門の相談体制を強化するため、宮城県が教育研修センター内に不登校相談センターを開設したのは、平成10年11月2日のことでした。背景には、児童虐待の激増や軽度発達障



相談にあたるスタッフは、さまざまな分野の専門家で構成されている

害(高機能自閉性障害・学習障害・注意欠陥多動性障害など)をめぐる問題の表面化などで、既存のさまざまな相談機関が手一杯になり、不登校相談に力を注げなくなったこともありましたが、しかし、根底にあったのは、教育にかかわる最大の課題に対し、教育サイドが全面的に責任をもって対応すべきという考えでした。

教育、精神医学、臨床心理学など幅広い分野から相談に応えるため、従来からの教育研修センターの指導主事を中心とする教育相談体制に加え、相談員や精神科医、臨床心理士をスタッフに迎えて発足しました。

宮城教育大学のかかわり

宮城県不登校相談センターの発足から3年半が経ち、その存在・機能は県内の教育現場に徐々に知られるようになりました。不登校はもちろん、いじめ、進路相談、行動上の問題など多岐にわたる相

談が数多く寄せられています。ちなみに平成13年度の相談件数は1901件(来所相談925件・電話相談976件)でした。

同センターの開設時から現在まで、宮城教育大学もさまざまなかかわりをもってきました。県教育委員会の要請を受け、児童青年精神科領域の臨床経験を積み重ねた教官を派遣することで、センターの機能を当初から支え続けてきました。さらに、本学の卒業生もスタッフとして参加、大学と教育委員会が連携し機能を果たしています。

今年度は、来所相談により回復傾向を示した子どもが再登校を始める際、よりスムーズに学校や教室に復帰することを応援するため、担当者が学校を訪問する新規事業がスタートします。宮城県不登校相談センターは、さまざまな課題に対応するメニューを加えながら、県内の不登校相談の中心的機関として、機能を拡充しています。

宮城県及び仙台市の教育委員会と「連携協力に関する覚書」を締結。

宮城教育大学は、3月27日に仙台市教育委員会と、同28日に宮城県教育委員会と「連携協力に関する覚書」を締結、調印式を行いました。この連携協力は、教員の資質・能力の向上や教育上の諸課題へ的確に対応することを目的に、これまで培ってきた両教育委員会との連携をさらに深め、組織的・継続的に行うためのものです。

調印式では、両教育長と学長から連携協力の意義、成果への期待が述べられました。新学習指導要領の実施や教員養成大学の再編・統合が話題になっていることもあり、多くの報道機関が取材に訪れました。

新たな取り組みとして、学生が教育現場でボランティアとして体験を積むこと、不登校児童・生徒の支援活動、さまざまな課題に関する教育委員会との共同研究、さらに体系的な教員研修への協力などが考えら



阿部仙台市教育長(左)と覚書を交わす横須賀学長

れています。

その後、5月16日に三者による連携推進協議会が設置され、初会合が開催されました。また、連携協力事業の第一弾として、6月18日には、横須賀学長が仙台市立立町小学校で6年生を前に特別授業を、7月9日には、阿部仙台市教育長が宮教大の学生を対象に特別講義を行いました。

イタリア・ペルージャ大学と姉妹校提携基本合意。

6月10日、イタリアのペルージャ外国人大学パオラ・ピアンキ・デヴェッキ学長が来学されました。本学学長を表敬訪問の後、今後の交流について、国際交流委員会と話し合いを行い、来春4月から留学生を交換することで意見の一致をみました。双方とも、大学派遣の留学生については、授業料を徴収しない点も合意しました。中国の東北師範大学、オーストラリアのセントラル・クィーンズランド大学、韓国の大邱教育大学校などと同様、往復の交通費と生活費だけで留学ができることとなります。

先のFIFAワールドカップサッカーでは、イタリア代表チームが仙台でキャンプを張ったことが話題となりました。大いに高ま



本学を訪れたペルージャ大学のパオラ・ピアンキ・デヴェッキ学長(前列右から二人目)

ったイタリアへの関心を持続させる意味からも、イタリア語の習得に情熱を燃やし、ペルージャの地への留学というゴールを決める学生が出ることを期待しています。

附属学校園で公開研究会を開催。

附属小・中・養護学校の公開研究会が、それぞれ6月6日、5月30日、6月7日に開催されました。

附属幼稚園では6月4日に開催され、「一人ひとりの育つ力を支える保育をめざして」を研究テーマに、3歳児から5歳児までの保育が公開されました。今年度は、園児が遊んでいる様子や教師の動きをよく見てもらうため、参加者の人数を制限しました。県内外から参加した方々からは「子どもたちの様子がよく見えた」「中身の濃い話し合いができて良かった」との感想が聞かれました。

12月6日には、保育研究協議会(仮称)



「ハイ!ミッキー、レッツゴー!」
ディズニー体操を楽しむ園児たち

が開かれます。幼稚園の今日的な課題について、参加者同士の膝を交えた話し合いが期待されます。

公開講座のお知らせ

お気軽にご参加ください

講座名	開設期間
食教育を考える ～学校給食を見なおす～	7/31(水)～8/2(金)
体験!化学の実験室 (実験・実習)	8/3(土)
木と遊ぶ (簡単なおもちゃ作り)	8/5(月)
学校教育のための校内 ネットワーク構築と運用	8/8(木)～9(金)
ボックスアートへの招待	8/9(金)～11(日)
日本の民俗舞踊を 踊りましょう!	8/16(金)～18(日)
南米・ボリビア音楽と その魅力～フォルクローレ への誘い～	9/1(日)
ガムランを楽しもう	10/12(土)～13(日)
実力養成講座 「指揮法の応用」	12/26(木)～29(日)

問合せ先 / 教務課教務企画係

TEL 022 214 3331

URL <http://www.miyakyo-u.ac.jp/>

宮教大入学試験のお知らせ

平成15年度 一般選抜入学試験について

入学試験の日程 /

前期日程試験:平成15年2月25日(火)・26日(水)

後期日程試験:平成15年3月12日(水)

入学試験の教科・科目及び配点等 /
7月中旬発表の「平成15年度入学者選抜要項」で公表

出願手続・期間、実施方法等の具体的事項 /
10月上旬発表の「平成15年度一般選抜学生募集要項」で公表

問合せ先 / 入学主幹付入学試験係

TEL 022 - 214 - 3334

URL <http://www.miyakyo-u.ac.jp/hp/exam/>

平成15年度大学院教育学研究科 (修士課程)入学試験について

入学試験(昼間・夜間主コース)の日程 /

平成14年10月12日(土)

(口述試験は、10月13日(日)に及ぶ場合もある)

学力検査(昼間・夜間主コース共通) /

外国語・専門科目(論述試験・口述試験)

出願資格・手続・期間、実施方法等の具体的事項 /
7月中旬発表の「平成15年度大学院教育学研究科(修士課程)学生募集要項」で公表

問合せ先 / 入学主幹付入学試験係

TEL 022 - 214 - 3334

URL <http://www.miyakyo-u.ac.jp/hp/exam/>

大学院夜間主コースのご案内

平成12年4月、大学院に昼夜開講制が導入されました。県教委からの派遣制度とは別に、現職教員の皆さんが働きながら学び、研究や教育能力の向上を図ることをめざしたものです。授業を受けやすくするため、講義と演習を夜間に、実験実習を土曜日や夏休みに配置しています。また、外国語科目を研究成果で代替でき、専攻によっては専門科目に現職教員にふさわしい科目を導入するなど、より受験しやすい制度も採用しています。現職教員の皆さんの入学をお待ちしています。

学校 シリーズ 3 博物誌

有備館から
三百有余年、
“伊達な小京都”に
異色の校舎建築

岩出山町立岩出山中学校



「風の翼(建物右)のカーブは政宗公の兜の三日月を思わせる

岩出山町は、伊達政宗公が1603年に仙台に移るまでの12年間居城した伊達家ゆかりの地。現存する日本最古の学問所「有備館」もここにある。2000年には、建築的にもユニークな、五感体験をテーマにした「感覚ミュージアム」が開館し、全国の注目を集めた。

岩出山中学校の新校舎も、この町の“伊達な”公共建築のひとつ。1996年に完成した。小高い丘の上であり、大きな帆のような防風壁「風の翼」が遠くからでも目に入る。設計者の山本理顕氏は、埼玉県立大学、公立はこだて未来大学など、ガラスやスチールを用いた開放的な学校デザインで知られる。岩出山中学校も工場建築のようなドライな作りだが、コンクリートや金属と木をうまく組み合わせて、冷たさは感じさせない。

教室編成は「系列教科教室型」と呼ばれる方式だ。学級ごとに固定され

た教室はなく、生徒たちが時間割に従って言語系、自然系、生活系などの部門別教室群の間を自主的に移動する。先生は各部門ごとに、ガラス張りのオープンな研究室に常駐している。教室群と研究室の間には「メディアセンター」があり、コンピュータや参考図書を利用して調べ学習やグループワークができる。



「メディアセンター」と教室群。両者をつなぐ仕掛けとして、仕切り壁に丸穴(ドット)を設けている

壮観なのは延長約100メートルの「多目的ホール」。学年集会や展示会にも使われるが、休み時間には生徒たちが伸び伸びと動き回る、活気あふれる空間だ。

芸術系は別棟に美術室と音楽室を

完備している。壁一面がガラス張りの音楽室は、ジャズの演奏会に使われたこともあるという。3階の図書室は眺望が素晴らしく、生徒ならざとも読書を楽しみたくなるような心地よさだ。

現・岩出山中学校は町内の真山中、一栗中と統合して再出発した。生徒数は400人余。少子化でその数



長大な「多目的ホール」。これに沿った「ホームベース」に生徒は個人用ロッカーを持つ

は毎年、数十人ずつ減っているが、生涯学習に熱心な学問の町」のシンボルとして、多様な活用の可能性を秘めた校舎といえるだろう。

〒989 6461
宮城県玉造郡岩出山町字松沢202 1
TEL.0229 72 4441
一般見学者を対象とした公開はしていません。

あとがき

「あおばわかば」は年3回刊行の広報誌として、昨年秋にスタートしました。年度をはさむこの第3号でひとつのサイクルが完結したことになります。

「あおばわかば」のねらいは、できるだけ多くの

方々に本学の素顔を知っていただくこと。発行部数は1万部です。これに倍する人々の目に触れているかもしれません。また、そうあって欲しいのですが、読者の顔は見えにくい。コミュニケーションを深め、本誌が読者にとってより身近なものになれば、と願っています。

本号の特集は「教師に求められる力」です。では「大学に求められる力」とは、と問いかけてくる読者もおられるかもしれません。

「あおばわかば」へ寄せられた声は、本学に対する期待と一つのもの。率直なご意見、ご要望をお待ちしています。(N)

MIYAGI UNIVERSITY OF EDUCATION
宮城教育大学